

# 「教員養成教育における教育改善の取組に関する調査研究」 の概要について

## 1. 調査研究の目的・概要

### (1) 調査研究の目的

教員養成の政策的課題としての、生涯学び続けることのできる学校教員のためには、その養成プロセスを担う大学教員の在り方もパラレルに問われることとなり、教員養成担当の大学教員に求められる能力やその研修枠組みの構成が重要となってくる。本班では、教員養成に関わる大学教員の授業改善並びに指導力向上に関する調査研究を実施し、教員養成段階における大学教員の研修(FD)の実態や能力開発の在り方、とりわけ、授業改善の手法として今後期待され取り込まれつつある、学生の能動的学修を促す学習方法であるアクティブ・ラーニングの導入に関する実態調査をメインとしている。

### (2) 調査研究の概要

国立大学教員養成学部におけるFDの調査によって明らかになった、教員養成教育における授業改善の実態と課題を踏まえて聞き取り調査を実施し、主に比較的体系化されているアクティブ・ラーニングに焦点を当てて、その概要、コンピテンシー、学習過程、評価、ラーニング・アウトカム等を総括表として取りまとめた。今後の教員養成教育における実践及び組織的な導入への可能性について、更に大学教員が学生たちに主体的・能動的な学びを身につけさせるための授業の在り方について、それぞれの領域から示唆を与える内容として事例紹介するものとしている。

【研究期間：平成26～27年度、教員養成FD班リーダー：川島啓二（高等教育研究部）】

## 2. 研究成果の概要

### (1) 教員養成FDとアクティブ・ラーニング

教員養成教育における課題の一つとして、組織的な教育改善への取り組み、ファカルティ・ディベロップメント(FD)の促進が挙げられている。平成21年に国立教育政策研究所において開発された「FDマップ」によると、FDプログラムを実施する対象によって「ミクロ・レベル(授業・授業法の開発)」、「ミドル・レベル(カリキュラム・プログラムの開発)」、「マクロ・レベル(組織の教育環境・教育制度の開発)」の3つのレベルに分けられているが、本班がアプローチしたのは「ミクロ・レベル(授業・授業法の開発)」における、アクティブ・ラーニングという能動的学修手法についての実態調査である。平成24年度の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」には、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」としてアクティブ・ラーニングという操作的

定義が踏襲されたが、生涯学び続けていくことのできる学校教員を教員養成教育において養成し、予測困難な時代を生きる子供たちを育てうる学校教育を展開していくためには、それぞれ背景と特徴をもったアクティブ・ラーニングの諸手法が、選択可能な教育の手法として試みられていくことが望まれる。そのための「マイクロ・レベル」でのFDの一つとして、アクティブ・ラーニングがどのように効果的に用いられているか、用いることができるのか、実践事例を収集し取りまとめた。

## (2) 教員養成系の大学教育で実践されているアクティブ・ラーニング事例

本報告書では、教員養成学部における取り組みの事例紹介を主としている。今回取り上げたアクティブ・ラーニング事例は以下のとおりである。

AL手法	大学	タイトル
PBL (Problem/Project-Based Learning)	三重大学	「教員養成課程におけるPBLの展開」 「PBL (Problem-based Learning, 問題基盤型学習, 問題に基づく学習)」
TBL (Team-based Learning)	高知大学	チーム学習を通して知識を獲得するチーム基盤型学習 (Team-based Learning: TBL)
ケースメソッド	千葉大学	「当事者意識で意思決定能力を磨くケースメソッド教育」
ディベート	聖心女子大学 立教大学	「根拠に基づいて主張する力と多角的思考を育むディベート型学習」
LTD (Learning Through Discussion)	久留米大学	「LTD話し合い学習法：理想的な学習・対話法」
「体験」型プログラム	島根大学 愛媛大学 上越教育大学 福井大学	「地域での活動と省察を中心とした「体験」型プログラム」
教育インターンシップ	玉川大学	「学校現場等に「浸(つ)かる」インターンシップ」
サービス・ラーニング※	明治学院大学	「学生の成長と地域社会との互恵的な関係を目指すサービス・ラーニング」

※教員養成教育における実践事例ではない。

参画した所外委員による聞き取り調査及び自らの授業内での実践例を取り上げ、近年取り組まれ始めた能動的学習方法を中心に体系的に総括した。それぞれ文末には担当したアクティブ・ラーニングに関するコラムを補足し、今後興味を抱き実践を志そうとする大学教員へ向けて、より身近な疑問への答えや、効果的な活用法、問題点、その意義等を紹介した。

## (3) 今後の教員養成教育とALの展望と示唆

ただ、予測困難な時代に備えた、新しい教員養成教育においては、より学生が主体的・能動的に学んでいくための新しい授業実践が行われていくべきことは論を待たず、アクティブ・ラーニングが組織的に取り組まれていくためには、既存の従来型の取組(教育実習、模擬授業等)との調整や、カリキュラム構成や課程認定上の問題も考慮しなければならない。また、片仮名で命名されたアクティブ・

ラーニングのような大学の授業における疑似体験的な取組よりも、現場での実際の経験の方が即戦力になる教員として能力形成につながるのではないかという声は、教員養成の世界においては依然として根強い。両者を過不足なく比較考量しつつ、いかにそのための組織的改革を柔軟に行うことができるか、さらに、いかに効果的にカリキュラムに取り込むことができるかが鍵となろう。そのために、まずはアクティブ・ラーニングの手法そのものの特徴が広く大学教員に認知されること、そして新しい時代により適合した教員養成教育のための選択肢の一つとして、本報告書が活用されることが望まれる。